

実施年度	: 2023 (2024 入試) 年度
試験日	: 2024 年 2 月 17 日
入試種別	: 大学院 (修士課程) 入学試験問題
学部・研究科	: 文学研究科 仏教学専攻
科目名	: 専門科目

【問題 1】 次の仏教教義の中から一つを選び、論述しなさい。

①四諦八正道: 釈尊が成道後、最初に説いた教法の内容である。四諦とは、苦(四苦八苦)に関する真理、集(原因、すなわち渴愛)に関する真理、滅(涅槃)に関する真理、道(実践道)に関する真理をいい、八正道とは正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の実践道をいう。この八正道の「正」の字は「不苦不楽の中道」を意味していることが重要である。鹿野苑で苦行仲間であった五人の比丘に対して説かれた。

②四法印: 諸行無常、諸法無我、一切皆苦、涅槃寂靜という仏教の旗印であり、それによって他宗教の教えと違うことが示される。

諸行無常とは、あらゆる現象は変化してとどまることがなく、生じたものは必ず滅するということ。諸法無我とは、仏教が説く、存在するものには「アートマン」はなく、「私」という存在も「常(永遠)・一(唯一)・主(主体)・宰(司宰)」といった実体概念として捉えられない、ということ。

一切皆苦とは、あらゆる営み、現象、我々の経験することが苦であると教えている。たとえば、生(生まれること)・老・病・死の四苦、怨憎会苦、愛別離苦・求不得苦・五蘊盛苦という、あわせて八苦である。

涅槃寂靜とは、涅槃は寂靜なりと、涅槃こそが最高の境地で、永遠の静寂、究極の安穩の世界であると、理想として求めるべきあり方を示している。涅槃とは覚りの世界であり、煩惱の火が完全に吹き消された状態をいう。寂靜とは平和を教えるものでもある。

③一切衆生悉有仏性: 大乘の「涅槃経」において説かれた真実。生きとし生ける者は仏の覚りのうちに包摂された存在であり、すべてが仏となる可能性を有しているということ。仏性とは **buddha-dhātu**, あるいは **buddha-gotra** である。dhātu とは仏を構成する要素であり、また本質的な因でもある。ただし煩惱が仏性を覆い隠しているために、直接的に顕わになっているわけではない。信無き者にどのように信が生じるのかが果報がどのように顕わにされるのか、その修

行道論が問われることとなる。その具体例として阿闍世が釈尊の慈悲の光りに包まれて救われることが説かれた。また如来蔵 *tathāgata-garbha* の言葉によって、衆生が如来の胎児であると譬喩的に示すことによって、一切衆生が必ず仏と成ることが説かれた。

【問題2】次の仏教者の中から一つを選び、論述しなさい。

①摩訶迦葉：釈尊の十大弟子の一人であり、頭陀第一と讃えられた。釈尊滅後の教団をとりまとめた。第一結集を行い、釈尊が説かれた教法と戒律をまとめ、後世に伝えるといった功績をもつ。

②曇鸞：世親の『浄土論』に註釈を施した『往生論註』の作者、中国・北魏の時代に活躍した人物である。彼の著書は日本の浄土教に多大な影響を与えたものとしてしられる。

③空海：日本の真言宗の開祖である。中国に遣唐使として趣き、中国の真言密教の教えを日本に伝えた。その主著に『即身成仏義』があり、密教、すなわち秘密の教えの内容が説き明かされた。

【問題3】 次の仏典の中から一つを選び、論述しなさい。

①『十地経』：菩薩が波羅蜜の自利利他の行を実践したことにより、仏へと成っていく、十の段階的境地を説いた経典である。その波羅蜜行は布施波羅蜜、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、禪定波羅蜜、智慧(般若)波羅蜜、方便波羅蜜、願波羅蜜、力波羅蜜、智波羅蜜の十であり、その修行の証果として初歡喜地(宗教的歡喜にあふれる境地)、第二離垢地(煩惱の垢を離れる境地)、第三明地(智慧の光明に輝く境地)、第四焰地(さらに光明に輝く境地)、第五難勝地(ほんとうに勝利しがたい境地)、第六現前地(真理の智が現前する境地)、第七遠行地(はるかに遠くにいたる境地)、第八不動地(まったく不動なる境地)、第九善慧地(いつでも正しい智慧がある境地)、第十法雲地(かぎりなき法雲のたなびく境地)という十地が説かれる。

②『摩訶止観』：中国・天台宗の開祖、智顛の主著の一つである。彼には天台三大部と称される著述、すなわち『法華文句』十卷、『法華玄義』十卷、そして『摩訶止観』十卷がある内の一つであり、一念三千という円頓止観を説いたものである。止観とは、心の静寂の上に成り立つ観察する智のはたらきをいう。法華経を究極の教えとして位置付け、仏教の真理観を明かしつつ、煩惱を断捨する修行道を体系的に解き明かした典籍である。

③『選択本願念仏集』：日本における浄土宗の開祖であり、親鸞の師匠に当たる、法然の主著

である。善導教学を指南として、阿弥陀仏も、釈迦仏も、諸仏もすべて、念仏以外の余行を選び捨てて、念仏一行のみを往生のための行として選びとられていることを、浄土三部経によって論証し、念仏が選択本願の行であることを明かし、浄土宗の立教開宗を宣言した典籍である。

【問4】 次の漢文を読み、何が書かれているかを解説しなさい。

言三學者。一増戒學。二増定學。亦名増意亦名増心。三増慧學。防禁名戒。澄靜曰定。定神内靜故復名意亦名爲心。觀達稱慧。於此三中進習稱學。學進名増。名義如此。問曰。是中何者學體。釋言。能學以心爲體。若論所學用戒定慧三行爲體。問曰。三學爲局在因。爲當通果。釋言。學心局唯在因。果徳窮滿學心停息。是故經中説爲無學。若論所學通因及果。
(『大乘義章』卷十)

出家者が学ぶべき三学、すなわち戒学、定学あるいは心学、そして慧学が説かれる。悪を為すことを防ぐことを戒といい、定は心を静め澄浄にすること、慧は真実を観察することをいう。学びがどんどん進むことを「増」という。戒を学び、戒学が進展することによって定学に進み、定学がさらに進展することによって慧学へと進んでいくのである。この三学はそれぞれ因果の関係にある。問う、——何者が学びの主体なのか。答える、——学びの主体は心である。学の対象のはたらきを論ずれば、上記の戒・定・慧のはたらきを本質とする。問う、——三学は因に限られるのか、それとも果に通じるのか。答える、——学心はただ因にある。その果報が極まれば、学心も止まる。それを経典では「無学」という。一方、所学を論ずれば、因にも果にも通じる。